

グスタフ・テオドール・フェヒナー、1801年4月19日に生誕し1887年11月18日に死去した彼は、1860年に出版された『精神物理学綱要』において刺激と感覚との間の対数的関係性についての法則を定立し、その彼の名を関する法則によって名を残している。彼の名はいまでは、ごくわずかな例外をのぞけばもっぱら、心理学、とりわけ精神物理学の歴史においてのみ流通している。だが、心理学と呼ばれる学問分野がまだ哲学から独立した地位を築いていなかった時代に——心理学の「起源」は1879年のヴントによる心理学実験室の創設に遡られるのが通例となっている——、自身「心理学者」を自称したことのない彼の名は、いかにして「心理学史」という言説に配分されることになったのだろうか。本論は、「心」についての学問的言説が大きく展開する時代の、そのはざまに置かれたフェヒナーという名の流通をめぐる小論である¹。

1 心理学史の創成

1966年、アメリカ心理学協会 (APA) に新たに創設された心理学史に関する部門 (第26部門) の最初の会議の席上、ある幽霊の声が聞こえてくる。

アメリカにおける心理学史の監督、主教、従って監視人 [Overseer] は、正当にも、そして幸福に我々の新しい部門の最初の議長に当選し、いまやこの部門の最初の議長の式辞を述べることで、過去に遡って手を伸ばし現在に受肉させる我々の企ての幕を切ろうとしている。私の理解するところでは、彼は三位一体の紹介を受けねばならない。というのも、主教を任命するには三人による按手が必要だからだ。我々の最初の議長は、一人の血肉を持った祝典の主によって、一人の幽霊によって、そしてそれから、

<http://repr.c.u-tokyo.ac.jp>

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論
表象文化論研究

1 (March, 2003): 98-127

ピウス七世の手から王冠を奪いとるナポレオンのように、まさに彼自身によって祝福されるはずである。それをあなた方はいま見るだろう。

幽霊とはもちろん私のことである。そこにおいてもあなた方の知恵全てを聞きとることはできないだろうから（私のコルチ器官のせい）、私はあなた方と席を共にすることはできないが、首尾よく帰還したあらゆる幽霊と同じく、私は霊媒 [medium] を通して語る事ができ、まさに今そうしているところだ。私は、心理学の歴史に対する関心がまだ今ほど活気に満ちていなかった頃の過去の歴史の幽霊であり、奇跡によって我々の部門の名誉議長に任命された。一方でボブ・ワトソンは、あなた方皆が彼を望んでいると今ほど確信できるには、選挙に懸からなければならなかったのに。[後略]²

幽霊とはエドウィン・G・ボーリングのことであり、彼はAPA第26部門の名誉会長に任命されたものの、耳を悪くしていたためその会議に列席することを望まなかった。かくして、ジョセフ・プロゼックを司会者（「血肉を持った祝典の主」とするこの席上、初代議長となったロバート・I・ワトソンを祝福する彼の声はジョン・ポプルストーンという媒体を介して響きわたることになったのである。ボーリングは1929年に大著『実験心理学の歴史』を書き上げた。心理学についての初めての体系的な歴史記述であったその書物は、それ以降現在にいたるまで読まれ続け、アメリカにおける心理学史の正典であるといつてよい。したがって、APA第26部門の初代名誉会長は、まさに彼にふさわしいポストだったのであり、彼はまさしく、心理学史の枠組を陰から規定し続ける「過去の歴史の幽霊」だったのである。

そのような彼の著作『実験心理学の歴史』は、「導入」「科学内における現代心理学の起源」「哲学内における現代心理学の起源」「実験心理学の創立」「ドイツにおける現代心理学の確立」「イギリスにおける現代心理学の確立」「アメリカにおける現代心理学の確立」「現代心理学におけるその後の傾向」「評価」の9部からなるが、そのうち「実験心理学の創立」の部の最初にフェヒナーが取り上げられる。同じ部においてフェヒナーに続くのはヘルムホルツとヴントである³。すなわち、ボーリングは心理学史の事実上の創立者であるといつてよいのだが、その心理学史においてフェヒナーの名は、心理学の〈創立者〉として、しかもそのうちの最初の名として数え上げられていたのである。そのようにフェヒナーを心理学の〈創立者〉として規定することにどのような意義があるのか、そのような規定はどのような関心のもとになされているのか。それが我々のフェヒナーという名への最初のアプローチとなる。しかしながら、よりプロブレマティックを明らかにするために、まずは、トーマス・クーンの『科学革命の構造』と、それに対する心理学、心理学史の研究者の反応を検討することにしたい。そこにおいて問題となるのは、

ある科学的言説の歴史を遡行する運動につねにすでに介在する、当の科学的言説の現在の正当性の確証へと向けられた政治的な関心である。

1-1 心理学（史）の危機

1962年にトーマス・クーンの『科学革命の構造』が出版されると、それは科学史の研究者の間に留まらない幅広い反響を巻き起こした。したがって、その理論を心理学の歴史に応用する論文が、それに引き続く70年代頃に心理学史の研究者達によって数多く書かれたことは、十分予想されることである。クーンのパラダイム論とは、パラダイムに支配される通常科学の時期と、その通常科学の危機およびそれに引き続く科学革命の時期として、科学の営みを分節化するものであった。それらの心理学史の論文においては、19世紀末のヴントらによる心理学の最初のパラダイムの形成、20世紀初頭におけるそのパラダイムの危機ならびに、それに引き続く行動主義のパラダイム、そして現在（すなわち70年代）における行動主義パラダイムの危機、という具合に心理学の歴史が分節化される⁴。もともとは物理学や化学をモデルとして構築されたクーンの理論を心理学に適用しようとするそれらの論文には、無理な議論が多々見られ、したがって、心理学はパラダイムを持たない、クーンの理論は心理学史の分析には適切ではない、といった批判がいくつかなされた⁵。しかし、ここでの問題としたいのは、心理学の営みが事実パラダイムを持つ通常科学であるかどうかではない。そもそもクーンによるパラダイムという用語の規定そのものが曖昧なものであってみれば⁶、それはほとんど問題を構成してさえいないだろう。むしろここで問われるのは、心理学史をパラダイム論に従って分節化するそうした述定的な記述のもつ^{コンスタティヴ}遂行的な側面である。^{パフォーマティヴ}

まず第一に、クーンの『科学革命の構造』においては、心理学史への言及はほとんどみられないことが注目されるだろう。すでに述べたように、クーンの理論におけるモデルとなっているのは、ニュートン物理学やラヴォアジエによる酸素の発見といった物理学や化学からの例であり、心理学への言及は、パラダイムの転換の非累積的、革命的性質を説明するためのアナロジーとして持ち出されるいくつかの心理学実験の例を除けば（それは心理学史への言及ではない）、通りすがりの言及が二箇所みられるのみである。しかも、そのいずれにおいても、心理学が、社会科学と並んでおそらくパラダイムをもたないであろうことが示唆されている。クーンがまえがきで述べるところによれば「天文学、物理学、化学、生物学をやっているものの中では、今日心理学者や社会学者の間に特にひろがっている根本的な

ことについての論争が生じることはない。」⁷ここでの「根本的なこと」とはすなわち、「科学における正統な問題とか方法の性質」⁸のことであり、クーン自身は明示的には述べていないものの、そのような問題について構成員の間で意見の一致を見ていないのだとすれば、心理学や社会科学は、クーンのいう意味でのパラダイムをもった通常科学とはみなし得ないことは容易に結論づけられる。したがって、上に述べたような心理学史にパラダイム論を適用する試みは、最初からクーンに逆らったものであったことになる。のみならず、そのような試みが論争をもたらしたこと自体が、心理学がパラダイムをもたないことを例証しているということ、クーン自身が先取りして述べている。以下に、クーンが心理学について述べた、より印象的なもう一つの箇所を引いてみよう。

「科学」という言葉は、たいいてい、明らかに進歩するという分野に使われる。このことが最もはっきり現れるのは、諸々の現在の社会科学のあれこれが、本当に科学であるかどうかという、繰り返えしおこる議論においてである。[中略] それらの議論に一貫して明らかに問題となっているのは、この厄介な言葉の定義である。たとえば、心理学はかくかくしかじかの特質を持っているから科学だと論じる人がある。それに対して、そのような特質はある分野を科学とするには不必要であるとか、十分でないとか、反論する人もある。この種の議論に大きなエネルギーが投ぜられ、感情的対立もかもし出されることがあるが、局外者にとっては、どうしてそんなに問題になるのか全くわからない。[中略] おそらく、実際には次のように問われるべきなのである。なぜ私の専門分野は、たとえば物理学のように進歩しないのだろうか。テクニックや方法やイデオロギーにどういう変化を加えれば、進歩させることができるのだろうか。こうした問いは、定義の一致を必要とするものではない。さらに、自然科学から取る前例が役立つとすれば、もはやこうした問いを気に病まなくなるのは定義が見つかるときではなくて、現在自分達の学問の地位を疑っているグループの人達が、過去、現在の成果について意見の一致を得るに至った時であろう。たとえば、経済学者が、社会科学の他のいくつかの分野の人達よりも自分達の分野が科学であるかどうか、あまり論じないことは、なかなか意味深いことであろう。それは経済学者が科学とは何であるか知っているからであろうか。あるいはむしろ、彼らの意見が一致しているのは、経済学についてではないだろうか。⁹

ある学問分野が「科学」であるかどうかは問題でなくなるのは、その構成員の間で、その分野の「過去、現在の成果について意見の一致を得るに至った時」、すなわちその学問分野が規範的なパラダイムをもった通常科学へと成長を遂げた時であ

る。したがって、クーンにならえば、心理学がパラダイムをもつかどうかは心理学史の研究者（その多くは自身心理学者である）の間で論争となるという事態において明らかとなるのは、結局のところ、心理学がパラダイムをもたないという事実である。心理学がパラダイムをもつと強固に主張すること、あるいはむしろ、主張しなければならぬということは、それ自体がその主張の意味内容を裏切る結果となる。

もちろん、このことで示されたのは、心理学がパラダイムをもたないという事実ではない。そうではなくて、ここで示されたのは、心理学がパラダイムをもつという主張の逆説的な性格である。しかしながら、この事柄に関してクーンが示唆するところは、それにとどまるものではない。なぜ、心理学者は、心理学が科学であると主張しなければならないのか。「局外者にとっては、どうしてそんなに問題になるのか全くわからない。」しかしながら、クーンによる問題の再定式化が鍵を与えてくれる。「なぜ私の専門分野は、たとえば物理学のように進歩しないのだろうか。」この問い方がより有意味であるのは、物理学が、進歩するための機構を備えた営みとして、すなわち「科学」として、すでにその地位を保証されているからである。事実、物理学は化学と並んで、長い間、実証的な科学の模範としての地位を保持し続けている。ある学問分野が「たとえば物理学のように」進歩するとしたら、その分野は十分に実証科学としての資格を持つことになるだろう。そして、心理学者の、心理学が科学であるという主張は、物理学や化学と並んで、一連の実証科学のうちに心理学を列したいという欲望の現れとみることができよう。また、心理学史をパラダイム論に則って分節化する営みは、心理学が「物理学のように」進歩するということを遂行的に示そうとする試みであるだろう。このようにして、ある学問分野の歴史を体系的に再構築する試みはおそらく、その遂行的な次元において、他の諸科学の間でその学問分野の地位を向上させるという政治的な関心に根ざしていることになる。

以上でクーンへの心理学者の対応に即して素描した、心理学の歴史的記述の政治的な側面は、ボーリングの『実験心理学の歴史』においてもみてとることができる。ボーリングは1920年代を費やしてその大著を書き上げたのだが、その歴史記述は、20年代の心理学の動向におけるボーリング自身の立場と無関係に考えられるものではない。70年代の心理学者達は、クーンに答えて、同時代に心理学の行動主義パラダイムの危機を見たのであったが、彼らの議論に乗るならば、20年代は古いパラダイムから新しいパラダイムに移行する、アメリカの心理学の危機の時代であったと言ってよい。ウィリアム・ジェームズ(1842-1910)やエドワード・ブラッドフォード・テイチェナー(1867-1927)といった、ヴントらによって始め

られたドイツの実験心理学の伝統をアメリカにおいて代表していた存在は、既に亡くなっているか、あるいは影響力を失いつつあった。一方で、ジョン・B・ワトソン (1878-1958) の 1913 年の論文「行動主義者から見た心理学」にさしあたりその起源をたどることのできる行動主義の影響力は、徐々に強いものとなりつつあったし、24 年にアメリカに移住したクルト・コフカ (1886-1941) らによるゲシュタルト心理学も、新たな勢力となりつつあった。また、20 年代アメリカの心理学が危機的な状況にあったのは、このように諸学派が割拠していたことのみによるのではない。一方では、大学行政において心理学ははまだ哲学からの独立性を十分に確保できずにいたし、他方、第一次大戦以来の応用心理学への需要の急増によって、純粋科学としての実験心理学の立場は弱いものとなりつつあった。そのような状況のなか、純粋科学としての心理学 (実験主義 Experimentalism) の主弁者であったティチェナーの弟子であるボーリングのとるべき立場は次のようなものであったことが指摘されている。まず第一に、実証科学としての心理学のために、哲学から独立した立場を確保すること、そして第二に、純粋科学としての心理学の立場を、応用科学化しつつある流れに対して擁護すること¹⁰。かくして、彼の〈歴史〉は、デカルト以来の哲学に起源をもつ心理学が、実証科学として哲学とは独立した領域をもつにいたる過程として描かれ、その〈歴史〉において〈実験主義〉のもつ企図が明らかにされることになる。

そうしたボーリングの歴史記述に関わる状況は、『実験心理学の歴史』第一版最終章「評価」の次のような記述からも見て取ることができるだろう。

いまや、次のように自問するのにふさわしい時がきた。新心理学は、どの程度自身を正当化したのだろうか。現代心理学に対しては次のような批判が、しばしば語られ、時には書かれている。すなわち、その新しい科学はこれまでのところあまり成功してはず、その野望と比べて比較的実りの少ないものであり、それは実験的方法によって精神を研究しようと企て、感覚についての大量の知識を得たが (それは生理学者達も得ているであろう)、他のものはほとんど得ていないし、理性的な精神、人格、人間の本性に関する重要な契機は全く得ていない、という批判である。この批判は、哲学者達によって表明されるときには、新心理学がとった展開への哲学者達の失望を反映している、あるいはさらに、心理学者達の哲学の否定論への彼らの反応であるとの嫌疑をかけられるかもしれない。しかしながら、もし心理学者達が自分自身を守る必要から解放されるなら、彼ら自身が心理学の進歩へのある不満を表明することも、全く不可能というわけではない。心理学は、その諸問題を攻撃することにおいて相対的に効果的ではなかったのだろうか。—— 70 年の展望が我々の眼下にある今、我々はこう問う

だろう。¹¹

このような問いに引き続きボーリングは、心理学者達による精神の問題への実験的方法の適用は、精神の研究において傑出する出来事であったことを強調し、しかしながら、実験心理学がこれまでのところ大きな進歩を見せていないことを嘆く。ボーリングによればその理由は少なくとも二つある。一つは、いまだ偉大な心理学者が登場していないこと、そしてここで問題となるのは二つ目のほうだ。ボーリングが二つ目の原因として挙げるのは、心理学の哲学との葛藤である。「心理学は、哲学を自身に取り込むことにも、哲学をそのままに置き去りにすることにも決して成功しなかった。」¹² 精神の領域を研究対象とする心理学が哲学から歴史的に派生してきたものである以上、実験的方法に依拠した体系として、それに哲学から独立した地位を与えるためには、認識論的な事柄に拘泥せざるを得ない。かくして、「心理学において自意識的な諸学派を導いた運動全て [中略] は、哲学的な運動であったが、それらを導いたのは大部分、哲学を避け、実験的な方法のみに依存しようとした人達であった」¹³ ことになる。そして、ボーリングのテキストが、「実験心理学の歴史の説明であると称しつつ、準哲学的、体系的な事柄に立ち入っている、その程度が、心理学内部で哲学が実験法と混ぜ合わされていることの尺度である。」¹⁴ ここでボーリングは、「心理学において自意識的な諸学派を導いた運動」の例として「ヴントの生理学的心理学、アメリカにおける内観主義、機能心理学、〈ゲシュタルト〉心理学、行動主義」を挙げ、「しかし、動物心理学やメンタル・テストは含まれない」としているが¹⁵、ここに応用心理学に対して〈実験主義〉を擁護するボーリングのバイアスを確認することができるだろう。この最終章は、次のように結ばれる。「心理学が、事実上ならびに言葉に表される原理において、完全に哲学の遺産を放棄し、分断された魂に邪魔されることなく、その仕事を進めることができるとき、心理学はよりうまくやっつけられるはずである。」¹⁶ すなわち、様々な学派に分断されている（それが正統な〈実験主義〉の衣鉢を継ぐものなどとは）現在の心理学の危機的な状況（「分断された魂」）は、そもそも心理学が哲学から独立した地位をいまだ獲得できていないがためなのであり、実験に方法的基礎をもつ実証科学としての心理学の体系的な歴史を書く必要性が、そもそもそこにあったのである¹⁷。

ところで、この第一版最終章の記述には、他にも注目すべき点がある。ボーリングは、「新心理学は、どの程度自身を正当化しただろうか」と問うのだが、その問いが発せられるのは、実験心理学の歴史が書き上げられた後、「70年の展望が我々の眼下にある今」であった。ボーリングの実際の記述は少なくともデカルトま

では遡られているのであるが、その中で実験心理学の歴史は70年間に限定されていて、したがって実験心理学は1860年前後に起源をもつことになる。1860年はフェヒナーの『精神物理学綱要』が出版された年であり、ボーリングの著作の「実験心理学の創立」の部がフェヒナーについての章で始まっていることを考え合わせれば、彼が実験心理学の70年の歴史の最初にフェヒナーをおいていたことは疑いない。彼の〈歴史〉が、独立した研究領域をもつ科学としての実験心理学の企図を明らかにすることを狙っていたことが、これまでに明らかにされたのだが、それではなぜ、その実験心理学の歴史はフェヒナーによって始まり、それ以前は前史とされるのだろうか。それはなぜ、例えば1879年に最初の心理学の実験室を創立したヴントよりも遡られ、また、例えば連合心理学を主唱し、1824-25年に『学問としての心理学』を著したヘルバルトまでは遡られることはなかったのだろうか。この問いに答えるためにまず、フェヒナーが実験心理学に果たした貢献を、ボーリングの記述に沿って確認することにしよう。

1-2 〈時代精神〉の中のフェヒナー

フェヒナーが実験心理学の発展に果たした貢献は端的に言って、刺激と感覚との間の対数的な相関関係を示す、いわゆる「フェヒナーの法則」の発見にあると言ってよい。『実験心理学の歴史』におけるフェヒナーについての記述は、伝記的事実が概略的に示される前半部と、フェヒナーの「精神物理学」が解説される後半部からなるが、その後者でフェヒナーの法則について詳述される。それでは、フェヒナーの法則とはどのようなものか。それはどのようにして、刺激と感覚との間の相関関係を打ち立てるのか。その問いに答えるためにまず、我々は感覚の大きさを直接測定することはできないということを確認しておく必要がある。「我々が観察できることは、感覚があるかないか、あるいは、ある感覚が他の感覚よりも大きい、等しい、あるいは小さいということのみである。感覚の絶対的な大きさについては、我々は何も直接的には知らない。」¹⁸ すなわち、我々は例えば、二つの重さの感覚を比較して、その一方が他方よりも大きいと報告することはできるが、そのそれぞれの感覚の大きさがある数値として報告することはできないのである。しかしながら我々は、ある感覚に対して、それを引き起こす刺激の値を知ることができる。したがって、刺激の値を測定することで、間接的に感覚の値を知ることができるかもしれない。例えば、二つの刺激を与え、その一方を固定し、他方を変化させることで、ある刺激の値に対して、その刺激との差にぎりぎり気付くことがで

きるだけの刺激の値の差を知ることができる。そのような刺激の値の差に対応する、ぎりぎり気付くことができる感覚の差 (just noticeable difference; jnd) を、すべて等しいと仮定し、数え上げることで、感覚を測定するための尺度が得られる。フェヒナーの法則とは、このようなテクニックを用いて刺激と感覚との相関関係を決定し、それによって感覚の値を間接的に測定することを可能にするものである。

感覚の大きさを S 、刺激の大きさを R とすると、具体的にはこの法則は次のように与えられる。まず、jnd に対して、刺激の大きさと、刺激の大きさの変化 (dR) との比率は一定で、したがって、次の等式が成り立つ。

$$dR/R = \text{constant, for the jnd}$$

これは E・H・ヴェーバーによって発見された事実で、したがってヴェーバーの法則と呼ばれる。jnd がすべて等しく、感覚の尺度となるという仮定から、上の式を、刺激の関数として感覚の変化 (dS) を表す式として次のように書き直すことができる。

$$dS = c dR/R \quad (c \text{ は比率の定数})$$

この式を積分し、定数を置換することで、次の式が得られる。

$$S = k \log R \quad (k \text{ は定数})$$

これが、感覚と刺激の間の対数的関係を表すフェヒナーの法則である。

以上のようにフェヒナーの法則は、直接測定することができない感覚の大きさを知るための間接的な手段を与える点で、実験心理学の発展に大きく寄与するものであった。しかしながらボーリングによると、フェヒナーの実験心理学への貢献は、正確にはこの法則そのものにあるのではない。例えばボーリングは、「フェヒナーをこの書物に含める唯一の理由である彼の精神物理学は、彼の哲学の副産物であった」¹⁹ と述べているのだが、フェヒナーのこの法則の「哲学的」解釈をいくつか紹介した後に、次のように述べている。「心理学内における偉大さへのフェヒナーの権利は、しかしながら、これらの彼の心理学的な着想に由来するのではなく、また、彼の有名な法則の定式化にも由来しない。」²⁰ ボーリングが認めるフェヒナーの貢献は、フェヒナーの法則の「定式化」にあるのではなく、その法則の定式化の過程で用いられたいくつかの測定の方法にある。ボーリングが重要視したのは、「彼が新しい諸々の測定の方法を思いつき、発展させ、確立したという事実、そして、それらの産物について後にどのような解釈がなされようとも、これらの方法は、実質上最初の精神の測定の方法であり、したがって計量的な実験心理学の始まりであるという事実」²¹ であった。すなわち、ボーリングがフェヒナーを、実験心理学以前と以後を分かち名とする理由は、実証科学としての実験心理学的方法的な基礎となるいくつかの測定の方法を彼が確立した点にあるのである。

前述したように、ボーリングの〈歴史〉はそもそも、哲学とは独立した領域をもつ、実証科学としての心理学の体系を示す関心のもとにあった。その際にもっとも大きな問題となるのは、直接計量することのできない精神の領域に、いかにして実証科学的な測定の方法を導入するかということである。したがって、感覚を間接的に測定するための測定の方法の確立という功績によって、フェヒナーの名が実験心理学の起源に位置づけられることは、とりわけ複雑な事態ではない。我々はそこに、自らの関心のもとに遡行的に歴史を体系化する運動を容易に見て取ることができる。再びクーンを引き合いに出すと、『科学革命の構造』には次のようなくだりがある。

当然の、しかも高度に機能的な諸理由によって、科学の教科書は（また、古風な科学史の本の多くも）、過去の科学者の仕事のごく限られた部分、つまり、教科書のパラダイムになっている問題や、その解答に直接役立つように見えるものだけにしか触れない。選択と歪曲によって、過去の科学者の姿は暗黙のうちに、科学の理論と方法におけるごく最近の革命で科学的とみなされるようになったものと同じ、定まった一連の問題に対して、定まった一連の基準に合うように、研究にいそしんでいたように描かれる。だから、教科書やその含意する歴史的伝統が、一つ一つの科学革命のあとに書き直されねばならないのは不思議ではない。また、書き直されると、科学が再びきわめて累積的な姿を呈するものも不思議ではない。²²

ボーリングの歴史記述のもつ性格もまさにこのようなものであり、1920年代の心理学の危機の時代にあつて（クーンの意味での「通常科学」の危機ではないにせよ）、彼は自身の帰属する規範に従って「累積的な」歴史を構築しなければならなかった。その点で、〈実験主義〉の基礎を築いたフェヒナーの名が〈歴史〉の最初におかれることには十分な理由があつたのである。そして、そのように〈歴史〉を遡行的に再構築する運動のうちに、我々はさらにもう一つの契機を確認することが出来る。ボーリングが認めたフェヒナーの功績は、フェヒナーの法則そのものではなく、その法則の定式化の過程で確立される測定の方法にあつた。すなわち、実験心理学の〈起源〉は、フェヒナーという名によって指示される法則²³には還元されないのである。ボーリングは、フェヒナーの名を実験心理学の起源におきながら、なぜ、その名の持つ特権性を同時に剥奪するのだろうか。

具体的に検討しよう。フェヒナーが彼の法則の定式化の過程で確立した測定の方法は、ボーリングによれば、三つの根本的な方法からなる。すなわち、「丁度

可知差異法 (method of just noticeable differences)」、「正しい事例と間違った事例の方法 (method of right and wrong cases)」、「平均誤差の方法 (method of average error)」の三つである。「丁度可知差異法」は、上述したように刺激を変化させ jnd を測定する方法であり、他の二つは誤差の統計的処理に大きく関わる方法である。『実験心理学の歴史』においては、この三つの方法が根本的なものとして述べられるのみで、それぞれについて個別に説明されることはないが、1942 年の『実験心理学の歴史における感覚と知覚』において個々の方法が詳述される。『実験心理学の歴史における感覚と知覚』は、『実験心理学の歴史』の続編としてボーリングによって書かれた書物で、「諸人物と諸学派の導入」として書かれた前作に引き続き、「感覚と知覚の分野における実験法と思考の歴史」がたどられる²⁴。この書物においてフェヒナーによって確立された方法について述べられるのは、導入として書かれた第一章「感覚と知覚」の「精神物理学」の項目においてである。精神物理学を創始したのがフェヒナーである以上、当然この項目ではフェヒナーが中心的に扱われるのだが、この項目はフェヒナーの名を冠してはいない。事実、『実験心理学の歴史』は、ボーリング自身後に「諸人物と諸学派の導入」と述べており、その部や章の多くは人物の名を冠していたが、『感覚と知覚』においては、章や項目に人物名が登場するのはむしろ稀である。この書物で叙述されるのは、まさに著者自身が序で予告するとおり「実験法と思考の歴史」なのであり、個々の研究者の名は、そのような実験法と思考の発展の中に解消されてしまうのである。フェヒナーも例外ではない。ボーリングによれば、「三つの根本的な方法のどれも、格別フェヒナーの独創というわけではなかった。フェヒナーはそれらを確立したが、発明してはいない。思考の歴史はほとんど常に連続的である。あらゆる重要な「新しい」考えには、より重要でない、しばしば曖昧な、先行者が伴うのである。」²⁵ かくして、これらの方法の個々についての叙述においても、それぞれの法則の発展を担う数々の名のうちにフェヒナーの名が位置づけられるのみで、その中でフェヒナーに特権的な位置が与えられることはない。『感覚と知覚』のボーリングにとって重要なのは、連続的に展開する方法や思考であり、それらはそもそも、断続を徴づける発見や定立のかたちで個々の研究者の名に帰属せしめられるものではないのである。

このようなボーリングによるフェヒナーの扱いは、フェヒナー以前と以後に挙げられる二つの名、ヘルバルトとヴントの位置づけと対照的である。すでに述べたように、ヘルバルトは 1824-25 年に『学問としての心理学——経験、形而上学、数学によって新たに基礎づけられた』を著し、独立した学問分野としての心理学の重要性を訴えた。ボーリングによれば、「ヘルバルトが心理学に与えたものは地位

であった。彼は心理学を、哲学と生理学の両方から取り出し、それ自身の使命とともに先へ送り出した。」²⁶ ボーリングがヘルバルトを実験心理学の前史に位置づける理由は、彼が実験の使用を認めなかった点にある。また、ヴントは、1879年に最初の心理学の実験室を開設し、したがって、一学問分野としての心理学を大学内において創立したのは彼である。ボーリングも述べるように、「彼は、留保なしに適切に心理学者と呼ぶことのできる最初の人物である。[中略] 我々が彼を実験心理学の「創立者」と呼ぶとき意味しているのは、彼が独立した科学としての心理学という考えを推し進めたということと、彼が「心理学者達」の中でもっとも年長であるということの二点である。」²⁷ ヘルバルトとヴントの二つの名において際立つのは、彼らがともに、諸学問の間での心理学の地位の確立ならびに向上に大きな貢献をしたという事実である。それに対して、フェヒナーの心理学への貢献は「彼の哲学の副産物」に過ぎず、事実、最初物理学の研究をし、後に哲学教授となったフェヒナーは、自身心理学者と称したことはない。それにもかかわらず、ボーリングの書物において実験心理学の起源を画するのは、ヘルバルトやヴントのような存在ではなく、フェヒナーである。のみならず、フェヒナーが重要視されるのも、彼の名を冠する法則によってではない。このことが意味しているのは、ボーリングの歴史記述において重要なのは、それぞれの名によって指示される、心理学の発展への多大な寄与をなした個々の研究者や法則ではないということである。そして、この態度を書物全体にわたって貫徹している点で、『感覚と知覚』は『実験心理学の歴史』に比べて、よりラディカルにボーリングの歴史観を反映していると言えるだろう。

そのようなボーリングの歴史観をより明示的に表すために、ボーリングは〈時代精神 (Zeitgeist)〉という語を好んで用いる。例えば彼は、『感覚と知覚』の「精神物理学」の項目を次のように始める。

フェヒナーは精神物理学をつくり、1860年に彼の『精神物理学綱要』を出版することで、それを確実なものにした。我々はここで、彼のこの業績がどのように可能であったか問わねばならない。感覚の測定を適切で理にかなった企てにした1850年代の知的状況とは、どのようなものであったか。創造的な想像力は、自発的な発生以上のものである。常にその父となっているのは、時代精神である。²⁸

心理学史についてのボーリングのテキストに頻出するこの〈時代精神〉という概念は、もちろんドイツ観念論に由来する概念である²⁹。しかしながら、ボーリングにおいてはこの概念は、「超有機的な魂、すなわち何世紀ものあいだに成熟を遂

げる不死の意識や、社会構造を貫く広がりをもたない実体では決してない。「時代精神」は単に、特定の時代や特定の地域に共通するような社会的な相互作用の総和とみなされねばならない。」³⁰ このような〈時代精神〉の規定が前提として
いるのは、歴史の進展が文化的に決定されているというボーリングの態度である。
彼は、「王は歴史の奴隷である」というトルストイの言葉を好んで引用する。歴史
上の人物の偉業は、彼の属する〈時代精神〉によって可能となるのであり、その
逆ではないのである。かくして、フェヒナーによる感覚の測定方法の確立は、19
世紀における「一般的な科学の目覚め、あらゆるものの実験的探求、望遠鏡や
顕微鏡といった観察器具の発明と改良、つまるところ、あの世紀を科学の時代の
始まりとして徴づけるすべてのもの」³¹ のうちの必然であったことになる。そして、
このような〈時代精神〉のうちでフェヒナーの研究が心理学以前と以後を画するも
のとして立ち現れてくることを示すためには、そのような連続的な歴史の進展のうち
でのフェヒナーの名の特権性は剥奪されなければならないのである。

もちろん我々は、心理学の創立がこのような〈時代精神〉の連続的な進行のう
ちに起こったというボーリングの見解を真に受けるわけにはいかない。このようなボ
ーリングの見解のうちに我々が読み取らなければならないのは、実験心理学の歴史
を個々の方法の発展の過程に還元することで、それを累積的に進歩する実証科学
として位置づけようとするその遂行的な性格である。ボーリングの〈時代精神〉
とは、実験心理学のそのような累積的な進歩の担い手として遡行的に構築された
虚構の媒体である³²。そのような虚構の媒体としての〈時代精神〉を解体するた
めに、我々は遡行的に自己規定される実証科学の一分野としての実験心理学の
範疇を越えていかなければならない。そのための準備として、我々は視点を転じて、
もうひとつの遡行、フェヒナー自身の遡行を振り返ることから次節を始めよう。

2 フェヒナー、あるいは Dr. ミーゼス

2-1 昼の観点

ある朝、私はライブツィヒの薔薇の谷でスイス風の小屋のそばのベンチに腰掛け、
茂みのすき間からその前に広がる美しい広大な草原に目をやった。私の病んだ両眼を
緑そのものによって回復させようと思っただことだ。太陽は明るく暖かく輝いていた。花々
は草原の緑からこちらに色とりどりに陽気にのぞき、その上やその間であちこちへ蝶た
ちがひらひらと飛び、私の頭上では木の枝で鳥たちがさえずり、朝の音楽会から響き

が私の耳へ沁みいった。そのようにして諸感覚は活動させられ、充足された。しかし、思考に慣れている者にとってそのような充足は長くは続かず、諸感覚の活動から想念の戯れが次第に紡ぎだされてきた。ここでその想念をほんのもう少し紡ぎだし、より整理されたかたちで再現してみよう。³³

フェヒナーの多岐にわたる仕事の集大成である最晩年の著作『夜の観点に対する昼の観点』(1879)はこのような書き出しで始まる。ここで述べられる、「諸感覚の活動」を停止させる「想念の戯れ」が、「夜の観点」である。この夜の観点によれば、我々をとりまく世界の全ては「暗黒、寂寥、静寂」に他ならず、「我々が周りの世界に見て取り、聞いて取っていると思っているものは全て、我々の内的な仮象、幻覚に過ぎない」。すなわち、「外部において光と音を機械的な諸法則と諸力によって支配しているが、我々の意識までは浸透していない、有機的な生物を越えた世界は、単なる盲目で沈黙した波動の進行であり、それが多かれ少なかれ振動している物質的な点からエーテルと大気を行き交っていて、我々の脳のもつれ合った蛋白質に出会ったとき初めて、それどころかおそらくは、ある決まった点そのものに出会って初めて、この媒体の交霊術的な魔力によって輝き鳴り響く振動に転換されるのである。」そして、「この魔力の規定、本質、詳細な諸規定については論争されているが、この事実については意見が一致して」いて、「そこに哲学者達と物理学者達、唯物論者達と観念論者達、ダーウィン主義者達と反ダーウィン主義者達、正統主義者達と合理主義者達が手を差しのべる」のである³⁴。しかしながらもちろん、「自然のままの人間は、このような教えに抵抗する」だろう。そのような人間は、彼が見て取り、聞いて取っている対象は、それ自体が輝き、鳴り響いているのだと考え、感覚を内的な幻覚とは思っていない。彼にとって、「輝きや響きは彼を越えた世界をわたって存在し、そして外から彼の中に向かっても存在する」のである³⁵。このような二つの観点、「夜の観点」と〈自然な〉観点に対してフェヒナーの昼の観点はどのように位置づけられるか。フェヒナーによれば、「夜を昼が引き継ぐのと同じくらい確実に、いつの日かかの世界の夜の観点を昼の観点が引き続くだろう。この昼の観点は、物事の自然な観点と矛盾せず、むしろそれに基礎づけられ、そこに新たな発展の土台を見出すだろう。」³⁶ この観点では世界と神はそれぞれ同じ実体の物質的側面と精神的側面と見なされ、したがって、「世界はそれ自体の見ること [Sehen] によって照らされ、それ自体の聞くこと [Hören] によって鳴り響く」。そして、「我々自身が世界から見、聞くものは、世界の見ることと聞くことの最後の枝分かれに過ぎない」。³⁷

このような夜の観点と昼の観点は、神と世界の関係に関して次のように対比され

る。

夜の観点によれば、神は、見るためのいかなる光も、聞くためのいかなる音も必要とせず、逆に盲目の光と沈黙した音はいかなる神も必要としない。そのようにして夜の観点では容易に一方から他方が消えてしまい、この土壌から唯物論が生い茂る。一方で昼の観点によれば、自らを必要とするものの双方が自らを要求し、一方が他方を支える。これによって唯物論が大地の下に沈み込む。³⁸

様々な立場に共通して学問の世界を支配していたはずの夜の観点は、ここではとりわけ唯物論と結びつけられている。というよりはむしろ、フェヒナーにとって唯物論は、精神と物質、神と世界を分離して考える態度の必然的な帰結である。そして、そのようにして生い茂った唯物論に対して、神と世界の一致のもとで精神と物質の相互作用を見ることによって、学問的なものの見方と世界に対する自然な態度を融和する昼の観点が希求されていたのである。

事実、フェヒナーが精神物理学的な仕事を様々な角度にわたって展開した19世紀中頃以降のドイツは、科学者達が次第に19世紀初頭に支配的であった思弁的な自然哲学から身を遠ざけ、科学者集団の間で唯物論的な態度が優勢を占めていく時期にあった。1838年にはマティアス・シュライデンが、1839年にはテオドール・シュヴァンが、それぞれ植物と動物の細胞説を提唱する。これは細胞が生物の組織とその発達の基本単位であることを示すものだが、同時に、生命力(Lebenskraft)といった曖昧な概念規定によって有機体の発達を説明しようとする旧来の自然哲学的な生理学に対する批判でもあった。続く1840年代頃には、カール・ルートヴィヒ、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ、エルンスト・フォン・ブリュッケ、エミール・デュ・ボア＝レイモンらによって、生理学を物理学と化学に還元し、有機体を機械として理解する立場が押し進められる。1847年にこの四人が初めて一堂に会したときのことを後にルートヴィヒは次のように回想するだろう。「我々四人は、生理学を化学-物理的基盤の上に構成し、生理学に物理学と等しい科学的水準をもたらすべきであると想像した」³⁹。さらに1850年代頃にはカール・フォークト、ヤコブ・モレショット、ルートヴィヒ・ビュヒナーらによって、フォイエルバッハの強い影響のもと、自然科学に基づく形而上学的な立場としての唯物論が提唱され、広い影響力を持つようになる⁴⁰。また、1858年には自然淘汰による種の起源と分岐を説明する進化論がチャールズ・ダーウィンとアルフレッド・ラッセル・ウォレスによって発表され、続く60年代以降には彼らの学説はドイツにも広く紹介されていく。ドイツでの進化論の受容に関してはとりわけ、ドイツ

での進化論の主弁者であり、進化論を唯物論的一元論と結びつけたエルンスト・ヘッケルの存在が注目されるだろう⁴¹。このように、19世紀中頃以降のドイツにおいては、生命をめぐる科学的言説が自然哲学的な思弁から唯物論的な観点へと大きく展開していく⁴²。したがって、フェヒナーがその晩年の著作において、二元論的な夜の観点をとりわけ唯物論と結びつけ、それとの対比において自身の精神物理学的な昼の観点を説く理由は、時代的コンテキストの内に求められるだろう。

それではフェヒナーは、このような同時代の生命に関する科学的言説と、個々の文脈においてどのような関係にあったのだろうか。もちろん、実際にはフェヒナーが期待したように「夜を昼が引き続く」ように夜の観点を昼の観点が取って替わることはなく、フェヒナーの呼びかけはついに聞き届けられなかったといつてよい。したがって、夜の観点を引き継ぐものとしてのフェヒナー自身による位置づけに反して、精神物理学的な昼の観点はむしろ、唯物論が支配力をもつ時代に遅れて現れて来た自然哲学的観点と見なすべきかもしれない。事実フェヒナー自身、自らの観点を、世界と神を一つの実体と見なす自然哲学的観点の発展型として見なしていた。しかしながら、フェヒナーは自らの観点が経験的な観察に基づくことを繰り返し強調し、先行する自然哲学からの切断を図っていたし、そのような経験的な方法は、それによって導かれる形而上学的な観点にも関わらず、同時代の科学者集団に広く受け入れられたことも事実である。したがって、次のことが問われなければならない。フェヒナーの精神物理学的な観点が同時代の唯物論的な観点に対するある「遅れ」として現れたとして、それはどのような位相における遅れであったのか。

ここで我々は、フェヒナーの遺したテキストの内容の詳細な検討へと足を踏み入れることを避け⁴³、そのかわりに、余白においてテキストの機能を徴づけるもの、すなわち作者名という要素の検討へと進むことにしよう。ここに、フェヒナーという名に加えてもう一つの名、Dr. ミーゼスという名が介入してくる。フェヒナーは、物理学者としてガルバーニ電気などの研究に携わっていた初期に、『天使の比較解剖学——ある素描』（1825）、『死後の生についての小冊子』（1836）といった思弁的な著作や詩などをDr. ミーゼスという偽名で出版している。そして、このフェヒナーとDr. ミーゼスという二つの名の交錯は、ロマン主義的な自然哲学から唯物論へと大きく展開していく同時代ドイツの科学的な諸言説の変容に、独特の仕方では符合しているのである。

2—2 偽名・匿名・祖名

フェヒナーは『昼の観点』を、ある朝ベンチに腰掛けていて思いついたことの回想から始めた。その回想を、唯物論的な夜の観点に対する彼の昼の観点として定立した後に、さらに彼は別の日の着想を回想する。

またある日、同じベンチから見晴らして、上に述べた全てに加えて次のことが思い浮かんだ：

私の眼は、その病気が再発する度に、近い文字を読むことや、通りに指す太陽の光や、部屋の中での太陽の黒点に耐えられなくなる。しかし、商号の大きく遠い文字の解読は、治癒力のある練習であるように感じられる。より遠くに眼を向ければ向けるほど、私の眼は元気を回復するよう感じられ、純然たる天空の眺望においてそれは最も大きくなるので、時折私は眼をそこに向ける。「それを何と比べようか」と私は問うた。あらゆる感覚的なものは、何か精神的なものの象徴として理解される。そして私は思ったのは、最も美しく、同時に最も正しいこの比喩の解釈は次の点にあるということである。すなわち、地上の対象や近くのものに圧迫されているとき、人々は慰めを得るために、遠くと高く眼を向けさえすればよく、より遠く高く眼を向けるほどそれは確かなものになるという点である。昼の観点においては、それをさらに良く考えることで、この観点への展望が開けるように私には感じられるが、一方夜の観点においては、人々は単にそれに差し向けられるだけである。ただ、まずもってこの展望を昼の観点のために開くことが肝要である。⁴⁴

フェヒナーは、膨大な量のフランス語の物理学や化学のテキストの独訳、八巻からなる家庭百科事典の編纂や、眼を酷使する主観的色彩の研究などの結果、1840年から43年の間、眼と精神の病に陥る⁴⁵。そして、彼が『ナンナ』に始まる精神物理学的な仕事を開始するのは、この病から快癒した後のことである。したがって、上の引用にも示唆されているように、この四年間にわたる病の期間が、彼が精神物理学的な観点を築くにあたって重要な契機をなしていると想定することが可能である。このことを証左するように、1845年に書かれたフェヒナーの自身の病気についての自伝的な記述には次のようなくだりが見られる。

ここで被っている苦悩全ての将来の生における埋め合わせへの信念と、全ての苦悩と災いが根本的に、新たな良きもの——それが現世の実存におけるものであれ来世のものであれ——をもたらす手段であろうという確信がよりいっそう私の中の力と活気を増大させた。そして、私の力がまさに尽きてしまわないかぎり、私の苦悩を担おうという決意は、私の苦悩に充ちた状態全体を通じて動じることがなかった。

私の現在の死んだ状態は、ただある種のさなぎの状態なのであり、そこから私は若返り、いつか新たな力を持って現世の生に生まれることが出来ると、私は時折考えたものであるが、しかし、それから再び私の最も高貴な力が完全に破壊されるのを感じると、同時にそのような希望の空しさを感じた。

[眼の回復の] 進歩が急激すぎるかもしれないと、その間、私と他の者は不安になった。そこで私は、意図的に眼を再び暗がりの中に引き戻し、時折しか強い光を与えないようにした。しかしながら、この日（[1843年] 10月5日）と次の日の朝と夕方に私は公園へ行ったのだが、ダリアや他の花々の壮麗さが私にどのような印象をもたらしたかを描写するのは困難である。あらゆる色彩と輪郭は、私には以前に見たよりもはるかに純粋で美しく見えたのであり、私は全く新しい力を私の眼に発見したと信じた。それは通常の健康な眼さえも越えてさらなる進歩を遂げているであろう。

確かなことは、私は当時、神自身によって特別な事物へと決定されていて、私の苦悩自体によってその特別な事物へと準備されていると信じていたし、特別な物理的、精神的な力の所有のもとに私がすでにあると部分的には思いこみ、部分的にはそれへの道の途上であると信じていたし、世界全体が、以前や現在とは違った光のもとに私に現れていたことである。世界の謎が解き明かされたように思われた。私の以前の実存はまさに絶え、現在の危機が新たな誕生であるように思われた。明らかに私の状態は、靈魂の攪乱に差し迫っていたが、次第に全てがおのずと平静のうちへともたらされた。⁴⁶

こうしたフェヒナーの回想には、フェヒナーが1836年にDr. ミーゼス名義で発表した『死後の生についての小冊子』の叙述との符号を確認することができるだろう。フェヒナーは『死後の生』において、人間は死後に、現世の生の後に続くより高位の生を生きるという考え方を展開している。それに従うならば、まさにそうした死後の生のように、フェヒナーは病を通じて以前よりも高位の生へと導かれたのであり、そこにおいて「世界の謎が解き明かされ」、汎神論的な昼の観点へと導かれた、ということになる⁴⁷。

もちろん、我々はこのようにある人物の思想をその人物の人生に還元する見方に対して慎重でなければならない。また、『ゼンド＝アヴェスタ』に結実する彼の世界観が、すでに病氣以前にDr. ミーゼスの署名のもとで素描されているのであってみれば、病からの快癒が全くの新しい世界観を彼にもたらしたと考えることは出来ないだろう。しかしながら、まさにそのDr. ミーゼスという偽名の使用に関し

て、病以前と以後にある交錯が見られる。すなわち、病以前の彼は、科学的な研究はフェヒナーの名で発表し⁴⁸、思弁的なテキストは Dr. ミーゼスの名で発表していたのだが、病以後の彼は、ごくわずかな詩作に対してのみ Dr. ミーゼスの名を使用するにとどまり、以前に Dr. ミーゼスの名のもとで示された観点は、科学的な研究と統合されてフェヒナーの名で発表されるようになる。そして、この交錯は、Dr. ミーゼスの初期の仕事と後のフェヒナーの精神物理的な仕事が根本的に異なった立場から書かれているという可能性をも排除している。というのも、1836年の Dr. ミーゼスのテキスト『死後の生』は、1866年に第二版が出版されるときには、フェヒナーの名のもとで刊行されるのであり、したがってフェヒナーはこの著作を一連の精神物理的な仕事に連なるものと見なしていたからだ。

このような偽名に関わる交錯を我々はどうのように理解すればよいだろうか。手引きとしてミシェル・フーコーを参照しよう。フーコーは「作者とは何か」で「《作者》という機能を担う言説」の四つの特徴を挙げている。そのうちの一つは、言説において作者の担う機能が時代によって変化するという点である。すなわち、「われわれの文明内において、かならずしもつねに同種のテキストが作者への^{アトリビュション}帰属を必要としてきたわけではない。」フーコーによれば、文学的言説がある作者名に帰属することなしに価値を持ち、逆に科学的言説は、その真実としての価値を持つために作者へ帰属する必要を持った時代が過去にあった。「ところが、」とフーコーは述べる。

ある入れ換えが十七世紀あるいは十八世紀に起りました。人びとは科学的言説をそれ自体として、すでに確定された真実ないしはつねに新たに証明する真実、という無名性において受け入れはじめました。それらに保証をあたえるのは体系的全体へのそれらの帰属であり、それらを創り出した個人への照合ではないのです。機能としての作者は消失してしまう、発明者の名はせいぜいある公理、ある命題、ある注目すべき効果、ある特質、ある物体、諸要素のある全体、ある病的な症候群を命名するのしか役立たなくなったのです。しかし他方《文学的な》言説は機能としての作者を付与されたかたちでしか、もはや受け入れられない。詩やフィクションのいかなるテキストに対しても、人びとは、それが何処から来たか、だれが書いたのか、いかなる日付に、いかなる状況で、あるいはどのような企てに発して書かれたのかと問いかけるでしょう。そしてなにかある偶発的出来事のためにせよ明白に作者の意志によるにせよ、それが匿名の状態であれわれに届いてくると、作者を発見しようとする動きがただちに起こる。文学上の匿名性はわれわれには耐えられないのです。われわれはそれを謎というかたちでしか容認しないのです。⁴⁹

このような〈作者〉をめぐる起こった科学的言説と文学的言説の間の交錯から、病以前のフェヒナーの実名と偽名の使い分けを我々は容易に理解することが出来る。すなわち一方でフェヒナーは、科学的研究に単に実名を記すことによって、無名性によって真理へと保証される科学的言説の体系の中に自らを帰属させる。逆説的ではあるが、ここではフェヒナーという実名はむしろその匿名性を証しているものであり、それは科学者集団に帰属する者の任意の名と取り替え可能である。そして、このことを裏打ちするようにして、『天使の比較解剖学』や『死後の生』といったあからさまに科学の体系から逸脱しているテキストに対しては、実名は記されず、偽名が用いられる。というのも、それらのテキストにフェヒナーの名を記すことは、フェヒナーという名によって送り返される主体が、科学の体系に帰属していないことを意味するからだ。したがって、それらのテキストには Dr. ミーゼスの偽名が用いられることによって、便宜的ではあれ、その名によって送り返される現実の主体を謎のままにとどめておかなければならなかったのである。フーコーも述べるように、作者は「純粹かつ単純にある現実の個人に送り返すのではなく、複数の自己、分類をことにする個人が占有しにやってくることのできる複数の立場＝主体を同時に成立させることができる。」⁵⁰ フェヒナーはこのような作者名の機能を最大限に利用していたと言えるだろう。

しかしながら、病以後のフェヒナーは、自身のうちに二つの主体を成立させるためのこのような戦略を破棄する。病以後にフェヒナーという一つの名によって送り返される主体とはどのようなものか。いずれにせよそれは、以前は二つの名によって担われていた二つの主体の明確な区別が失われることを意味するのだが⁵¹、そのような統合された名の機能をめぐって、我々はさしあたり二つの仮説を立てることが可能である。まず第一に、それが以前は Dr. ミーゼスという名によって支持されていた主体の匿名的な科学的言説の体系への解消を意味するという可能性（作者の機能の参照点の文学的言説から科学的言説への移行）。そして第二に、フェヒナーという名の科学的言説の匿名性からの突出を意味するという可能性（科学的言説から文学的言説への移行）。もちろん、作者名が様々な言説において担いうる機能は、その作者名が指示する現実の個人の意図とは必ずしも一致しないのであり、したがって、フェヒナーがこれらのテキストの実名を付すことによってこれこれのことを意図していたというようなかたちではこの問題は解決されない。作者名が担う機能は、むしろ言説の流通の形態において規定されるのであるが、その機能は常に重層的であり、我々はそれを一定程度まで定式化し分類することは出来ても、一意的に決定することは出来ない。したがって、我々は次のように考えるべきだろ

う。すなわち、病以前においてフェヒナーと Dr. ミーゼスの二つの名の弁別が担っていた、おそらくはかなりの程度まで現実のフェヒナーの意図通りの機能は、病以後には機能不全に陥っていたのではないだろうか。フーコーによれば、「作者名は固有名詞のように言説の内部から言説を産出した外部にいる現実の個人に向うのではなく、いわばテキスト群の境界を走り、テキスト群を輪郭づけて浮きあがらせ、その稜線を辿って、その存在様態を顕示する、あるいは少なくともその存在様態を性格づける」。⁵² しかしながら、病以後のフェヒナーの名は、むしろテキスト群の境界を横断し、その輪郭をぼやけさせ、署名されるテキスト群の存在様態を曖昧にし、科学的言説と文学的言説の間に広がる空間に宙づりにするのである。

以上の分析から、我々は前節で検討したボーリングによるフェヒナーの位置づけをより明瞭に理解することが出来る。ボーリングは、フェヒナーの実験心理学への貢献を、彼の確立した三つの実験法に限定し、さらにそれらを実験法が様々な科学者達によって発展させられていく過程の中においた。そのようにすることによって彼は、フェヒナーを連続的に発展する〈時代精神〉のうちにおき、フェヒナーの名を科学的言説の匿名性のうちに解消する。そして、そのようにしてフェヒナーの名を突出させないことによって、逆説的にフェヒナーの名を、実証科学としての実験心理学の起源に位置づけることが可能になるのである。こうしてフェヒナーと Dr. ミーゼスの弁別は再び確保され、フェヒナーの経験科学者としての側面のみが、実験心理学への寄与に割り当てられることになる。しかしながら、すでに概観したように、このようなボーリングの評価に反して、フェヒナーを精神物理学へと導いたのは、フェヒナーの汎神論的な世界観なのであり、その両者を切り離して考えることは出来ない。精神的なものを不可知の領域に留めておこうとする同時代の唯物論に逆らって、精神と物質の関係の探求の道を切り開いたのは、フェヒナーの汎神論的な世界観であった。実験心理学が他の生命諸科学に対して遅れて現れた事実、そしてフェヒナーが現に実験心理学の先駆として機能した事実は、おそらくこのような唯物論をめぐる対立、昼の観点と夜の観点の対立に根ざしている。しかし、このことが示すのは、ボーリングによるフェヒナーの誤認ではなく、むしろボーリングによるそのような評価の必然性である。というのも、ボーリングがフェヒナーを科学的言説の匿名性のうちに位置づけなければならなかった理由は、まさしくこのようにして精神の領域の研究が長年認識論的な葛藤から自由でなかったことに起因する実験心理学の実証科学としての後進性にあるからである。実験心理学の後進性ゆえに、彼はそれが経験的な実証科学であることを示すために、パフォーマティヴ 遂行的にフェヒナーの名を、それが付されるテキスト群の存在様態を科学的言説として際立てるものとして機能させなければならなかった。このようにして我々は、

フェヒナーの名をめぐる歴史的な循環に送り込まれることになる。

分析をさらに続けよう。以上のような循環において、フェヒナーの名は、科学的言説の匿名性と、文学的言説の偽名性、虚構性の間を往復していただけたらどうか。我々はおそらく、そこにもう一つの極を導入しなければならない。というのも、ボーリングがフェヒナーの名を科学的言説の匿名性のうちに解消するときには、その解消の身振りにおいて再びフェヒナーの名が固有なものとして際立つように思われるからである。おそらく名が流通する空間には、科学的言説の匿名性と文学的言説の偽名性以外に、歴史的言説に関わるもう一つの極が作用しているのである。そして、そのことにボーリングは無自覚的であったわけではない。彼は、フェヒナーの『精神物理学綱要』出版から100年後の1960年に、精神測定学会の25周年記念式典である講演を執り行う。その成立の条件が創立者フェヒナーへのオマージュを要請しているはずのこの講演は、「フェヒナー：精神物理学の偶然的創立者」と題されている⁵³。フェヒナーを「偶然的[inadvertent]創立者」と呼ぶことのうちに我々は、二重の意味を認めることが出来るだろう。すなわち、一方で、ボーリングが述べるように、フェヒナー自身にとっては精神物理学は「彼の哲学の副産物」に過ぎず、彼は自覚的に実験心理学の創立者であったわけではない。他方で、フェヒナーの精神物理学がどのような認識論的な前提に裏づけられていたかどうかは、その後の実験心理学の発展にとっては無関係であり、フェヒナーの名は科学的言説の匿名性のうちの任意に交換可能な名の一つに過ぎない。かくして、ここにおいても『感覚と知覚』と同じくボーリングは、フェヒナーの発見が、精神の測定へと向かう〈時代精神〉のうちにあったことを確認する。しかしながら、ここには『実験心理学の歴史』や『感覚と知覚』においては必ずしも顕在化していなかった契機を確認することが可能である。ボーリングは次のように述べている。

概して〈偉大な人物達〉の偉大さは、歴史への主観的な付与であり、歴史を理解するために後代によって付け加えられる。歴史は連続的でなめらかである。〈偉大な人物達〉は、そのなめらかな側面に取り付けられる取っ手である。自然な出来事は、理解するためには単純化されねばならず、科学そのものは、思考の経済という関心のうちで一般化を強いられる。それゆえ科学の歴史は、諸々の出来事、学派、傾向、発見を選び出し、祖名[eponym]を付す。言い換えると、中心的な人物の名をとってそれらを命名するのである。フェヒナーは、新しく発展する科学的心理学における変化、すなわち、うつろい消えていく精神——意識——が測定されうるといふ信念の漸進的な受容につけられた名となった。⁵⁴

祖名とは、由来となった人名を付された名前を意味する。そして、「歴史は連続的でなめらかである」が、その理解のためには、断絶を徴づける「取っ手」としての祖名が必要である。その意味で、祖名はプラーシボ（死者のための晩課／気休めの薬）である⁵⁵。

前節で我々は、歴史記述に内在する選択と歪曲について述べたクーンの言葉を引いた。この言葉は、「革命の不可視性」と題された章で述べられる。クーンによれば、科学革命が後代にとって目立たないのは、断絶を隠蔽し科学の営みを累積的に描く歴史記述の性格のためである。この引用の直後にクーンは、ホワイトヘッドを引きつつ次のように述べている。

ホワイトヘッドは科学者社会の非歴史的精神を捉えてこう書いている。「その創立者を忘却することをためらう科学は、道を踏み違えている」と。しかし彼は十分正しいとはいえない。科学もほかの専門的職業と同じように自分達の英雄を必要とし、その名前を保存しようとするからだ。幸いにして科学者は、英雄を忘れるかわりに、英雄の仕事を、忘れるか書き直すことができるのだ。⁵⁶

科学が進歩する営みであるならば、過去の偉大な人物達の業績は、更新され、新たな枠組の中に組み入れられていかなければならない。したがって、科学の歴史が現在の視点から記述されるときには、個々の科学者の仕事は、現在に至るまでの累積的な進歩の過程における通過点として位置づけられ、再解釈されることになる。例えばフーコーは、このように常に過去の人物の業績を更新し、新たな体系に組み込み直す科学的言説の特性に対し、常に創始者の名へと回帰する精神分析とマルクス主義を際立たせている。フーコーによれば、フロイトやマルクスはある《共通言説性ディスキュルシヴイテの創始者》であり、精神分析とマルクス主義の言説は、その創始者のテキストへと常に回帰することによって自己を変容させていくプロセスを内在している。それに対して科学的言説においては、例えばガリレオのテキストの再検討が力学史についての認識を変えることはあっても、力学そのものを変えることはない⁵⁷。これに対して我々が確認してきたことは、科学的言説の歴史記述とその科学の現在の位置が相互に織り込まれていることである。ボーリングは、1920年代の心理学の危機の時代にあつて、その危機の克服のために、実験心理学の創始者フェヒナーという主体を成立させなければならなかった。したがって、我々はフーコーによる共通言説性ディスキュルシヴイテと科学的言説との対比の強調点をずらし、次のように述べなければならない。すなわち、精神分析やマルクス主義においては、その創始者のテキストが回帰的にそれ以後の言説の変容を条件づけるのに対して、科

学的言説においては、その言説の現在の条件が遡行的に創始者の主体を過去に向かって投影し、その特質を規定する。クーンも述べるように、科学的言説は進歩する営みとしての自身を賞賛するために、過去の英雄を必要としているのである。祖名とは、虚構の過去から現在へと常に呼び戻される、そのような科学の累積的進歩の象徴である。かくしてボーリングは、精神物理学誕生 100 周年を祝う講演の結び近くで、まったく正当にも次のように述べる。

そして今ここで、我々は『綱要』の 100 周年を祝っている。フェヒナーを賛辞することで、もちろん我々は我々自身を賛辞しているのである。100 周年は、実質上宗教的な儀式である。[中略] 我々自身にとって必要なのは、我々の信念の象徴である。すなわち、科学と測定と計量に対する我々の信念の。壁にフェヒナーの肖像を架けるのは正しい。それは、我々が価値あるものにしたいと望むものの象徴である。あなたの息子が 10 月 22 日に生まれることを喜ぶのは正しい。偉大な名前から名をとること [eponymy] によって〈歴史〉のなめらかな流れを原子化することは正しい。⁵⁸

このようにして、科学のなめらかで累積的な進歩を担う科学者達の匿名性は、その進歩の過程が遡行的に再構築され、賛辞されるときには、歴史的言説の祖名性によって「原子化」され、再び個々の際だった主体へと呼び戻されることになる。そのようにしてフェヒナーとは、まさに実験心理学の起源の名である。もちろん、そのような歴史的言説の祖名性によって生起する主体、すなわち実験心理学の創立者フェヒナーは、フェヒナーという実在の人物からはすでに乖離しているのだが。そのような乖離から我々が読み取らなければならないのは、精神と物質の関係についてのフェヒナーの研究を起源に持つ心理学が、ボーリングの意図には反して、おそらく認識論的な葛藤と無縁ではいられないことである。我々の論考は以下のような試みであったことになるだろう。すなわち、フェヒナーの名を、偽名と匿名と祖名の間広がる限りなく不安な空間へと送り返すこと。

註

1. 本論の主題は、文字どおりの意味において、フェヒナーという名の流通そのものであり、フェヒナーの仕事自体についての言及は、彼の名の流通をたどるための必要最低限のものにとどめられるだろう。フェヒナーの仕事を内在的に読解する作業を、筆者は「G. Th. フェヒナーの精神物理学：哲学と心理学の間、精神と物質の間」(『現代思想』2000年4月号)において試みた。そうした内在的読解において明らかにされる事柄は、無論、諸言説の異種混交のなかに位置づけられることが待たれているのであり、本論はいわばそうした作業に向けての補遺である。なお、本論文は、東京大学大学院表象文化論コースに1999年度修士論文として提出された「G. Th. フェヒナー論：心理学の起源の名」を第一章、第四章を中心に加筆訂正を加え再構成したものである。
2. Ernst R. Hilgard, "Robert I. Watson and the Founding of Division 26 of the American Psychological Association," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 18 (1982): 308-311 より引用。
3. Edwin G. Boring, *A History of Experimental Psychology*, 2nd ed. (New York, 1950). ボーリングは第二版の出版に当たって大幅な変更を加えたとしているが (Boring xiii-xvi)、全体の構成についての変更はなく、また、その歴史記述を支える理念においても基本的には同一であることが指摘されている (Robert A. Friedman, "Edwin G. Boring's "Mature" View of the Science of Science in Relation to a Deterministic Personal and Intellectual Motif," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 3 (1967): 17-26)。したがって以下では、より広い読者を得たと考えられる第二版を基本的には参照し、特に必要がある場合のみ第一版も検討する。
4. 例 え ば、David S. Palermo, "Is a Scientific Revolution Taking Place in Psychology?," *Science Studies* 1 (1971): 135-55; Walter B. Weimer and David S. Palermo, "Paradigms and Normal Science in Psychology," *Science Studies* 3 (1973): 211-244; Irving Kirsch, "Psychology's First Paradigm," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 13 (1977): 317-325; Allan R. Buss, "The Structure of Psychological Revolutions," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 14 (1978): 57-64 など。
5. Neil Warren, "Is a Scientific Revolution Taking Place in Psychology? –Doubts and Reservations," *Science Studies* 1 (1971): 407-413; L. B. Briskman, "Is a Kuhnian Analysis Applicable to Psychology?," *Science Studies* 2 (1972): 87-97; Mark W. Lipsey, "Psychology: Preparadigmatic, Postparadigmatic, or Misperadigmatic?," *Science Studies* 4 (1974): 406-410; Brian D. Mackenzie, "Behaviourism and Positivism," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 8 (1972): 222-231. また、そのようにしてある一つの科学言説の歴史の分節に、ある理論を適用することをめぐる諸問題について、

最終的にクーンに同調するかたちで論じられたものとして、Walter B. Weimer, "The History of Psychology and its Retrieval from Historiography: I. The Problematic Nature of History," *Science Studies* 4 (1974): 235-258; "The History of Psychology and its Retrieval from Historiography II: Some Lessons for the Methodology of Scientific Research," *Science Studies* 4 (1974): 367-396 が挙げられる。

6. Margaret Masterman, "The Nature of a Paradigm," *Criticism and the Growth of Knowledge*, ed. I. Lakatos and A. Musgrave (Cambridge, 1970) 59-89 によれば、クーンの用いる「パラダイム」という語の意味はは22通りあるという。クーン自身もこのような曖昧さには自覚的で、『科学革命の構造』の第二版以降に付け加えられた「補章——1969年」において、パラダイムに替わるより限定された意味を持つ語として、"disciplinary matrix" という語を提案している (Thomas Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, 2nd ed. (Chicago, 1970) (トーマス・クーン『科学革命の構造』中山茂訳 (みすず書房, 1971)))。

7. Kuhn viii (クーン iv-v、以下、日本語訳が存在するテキストの引用には対応ページを付すが、訳文は適宜変更している場合がある)。

8. Kuhn viii (iv)。

9. Kuhn 160-161 (180-181)。

10. 以下を参照。John M. O'Donnell, "The Crisis of Experimentalism in the 1920s—E. G. Boring and His Uses of

History," *American Psychologist* 34 (1979): 289-295; Franz Samelson, "E. G. Boring and His History of Experimental Psychology," *American Psychologist* 35 (1980): 467-470.

11. Edwin G. Boring, "Interpretation," *History, Psychology, and Science: Selected Papers*, ed. Robert I. Watson and Donald T. Campbell (New York and London, 1963) 26 (『実験心理学の歴史』第一版の最終章の再録)。

12. Boring, "Interpretation" 27.

13. Boring, "Interpretation" 27.

14. Boring, "Interpretation" 27-28.

15. Boring, "Interpretation" 27.

16. Boring, "Interpretation" 28.

17. 21年後に出版された第二版においては、ボーリングの態度は大きく変わっている。そこでボーリングは、初版での自身の言葉を振り返りつつ、心理学はすでに、方法の上でも制度の上でも哲学からの独立性を確保しており、「1950年においては、いかなる弁明も不要」(Boring, *History* 741)であり、「組織としての心理学は、個人の人生の諸段階を反復して、いまや青年期を乗り越えて、生活と思考の両面での独立した成熟に至った」(Boring, *History* 742)と述べる。ここで注目されるのは、ボーリングが実際に強調しているのは、学問としての方法上の進歩よりもむしろ、制度的な進歩、より社会に認知されるようになったということであり、それは、ボーリングが初版に比べて応用心理学に対してはるかに寛容な態度をとっていることも無関係ではない。ボーリングは次のように述べている。「このようにして心理学は、自身が

求められるようになることで、青年期の神経症から逃れたのである。というのも、現実と結婚することで、それは成熟を得たからだ。」(Boring, *History* 743)

18. Boring, *History* 286-287.

19. Boring, *History* 279.

20. Boring, *History* 293.

21. Boring, *History* 293 (強調はボーリング)。

22. Kuhn 138 (155) .

23. 正確には、フェヒナー自身は、「フェヒナーの法則」という名称を用いていない。ボーリングの説明によると、彼が途中経過の式に対して発見者にちなんで与えた名称「ヴェーバーの法則」を、フェヒナーは最終的な定式の名称としていたという。しかしながら、これも正確ではない。実際にはフェヒナーは、二つ目の式によって示される、刺激の相対的な変化に感覚の変化が相関するという法則性には「ヴェーバーの法則」の名称を与えるが、数学的処理の結果得られる最終的な定式は、それとは別個の法則を構成していると考えず、単に尺度定式 (Maßformel) と呼んでいる (Gustav Theodor Fechner, *Elemente der Psychophysik*, 3rd ed., 2 vols. (Leipzig, 1907))。「フェヒナーの法則」という呼称がいつ頃、誰によってなされたのかは定かでないが、ボーリングによると、『実験心理学の歴史』が執筆されていた当初にすでに、「フェヒナーの法則」と呼称を改める傾向がみられたという (Boring, *History* 280)。

24. Edwin G. Boring, *Sensation and Perception in the History of Experimental Psychology* (New York,

1942) vii.

25. Boring, *Sensation and Perception* 37.

26. Boring, *History* 252.

27. Boring, *History* 316.

28. Boring, *Sensation and Perception*

34. 強調はボーリング。

29. フリードマンによれば、ボーリングがこの概念を初めて用いたのは、『感覚と知覚』においてである (Friedman, "Edwin G. Boring's "Mature" View" 22)。したがって、1929年の『実験心理学の歴史』と1942年の『感覚と知覚』の間に、ボーリングの態度の変更を仮定することが可能である。この仮定によって、なぜ、測定の方法の発展の過程においてフェヒナーの名が特権視されないのに、実験心理学以前と以後を画するのはフェヒナーの名であるのか、という我々の当面の問題が解決されるかもしれない。すなわち、『実験心理学の歴史』においては、偉大な科学者としてのフェヒナーの業績を重視していたが、『感覚と知覚』においてはそのような態度を取らなくなるという仮説である。例えば、既にみたように『実験心理学の歴史』初版の終章では、心理学がまだ大きな進歩を遂げてない理由の一つとして、偉大な心理学者が現れていないことを挙げていた。『感覚と知覚』のボーリングは、このように科学の進歩を牽引する偉大な人物の役割を認めない。しかしながら、これはむしろ例外的な事例とみるべきであって、フリードマンが詳細な検討の結果結論づけるように、後期において「明示的」になる「成熟した」観点 (〈時代精神〉) は、初期にも「暗示的」に示されている。のみならず、

1860年頃に実験心理学の起源をみる初期の立場が後に覆されることもない。例えば、『実験心理学の歴史』改訂第二版の最終章「回顧」においては、実験心理学の歴史を出版年である1929年から遡って70年間とみる初版の記述を引用した後、次のように述べている。「70年間！そして今や、展望は90年間にまで引き延ばされた。」(Boring, *History* 741)

30. Edwin G. Boring, "Dual Role of the 'Zeitgeist' in Scientific Creativity," *Psychologist* (1955): 327-328.

31. Boring, *Sensation and Perception* 34.

32. ドロシー・ロス は、ボーリングの影響下で心理学史家に「時代精神」という語が多用されることを批判している。ロスによれば、この曖昧な概念は、歴史の複雑な総体の分析には向かず、結果としてこの概念を用いるボーリングらの著作の正当な評価への妨げにすらなる。Dorothy Ross, "The 'Zeitgeist' and American Psychology," *Journal of the History of the Behavioral Sciences* 5 (1969): 257-262 を参照。

33. Fechner, *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht* 3.

34. Fechner, *Die Tagesansicht* 3-4.

35. Fechner, *Die Tagesansicht* 4.

36. Fechner, *Die Tagesansicht* 5.

37. Fechner, *Die Tagesansicht* 5.

38. Fechner, *Die Tagesansicht* 5-6.

39. Paul F. Cranefield, "The Organic Physics of 1847 and the Biophysics of Today," *Journal of the History of*

Medicine and Allied Sciences 12 (1957) より引用。

40. フレデリック・グレゴリーは、厳密な意味で科学的唯物論者と呼ぶことが出来るのはこの三人だけだとしている。グレゴリーによれば、科学的唯物論は次の四つの教義によって構成される。「(1) 独立して存在する世界があること、(2) 人間は、他の全ての主体と同様、物質的な存在物であること、(3) 人間の精神は、人間の肉体と切り離された存在物としては存在しないこと、(4) その存在の様態が物質的な存在物とは異なる神は（そして人間とは異なる他のいかなる存在も）存在しないこと。」(Frederick Gregory, *Scientific Materialism in Nineteenth Century Germany* (Dordrecht, 1977) x-xi) グレゴリーによれば、このような形而上学的な公準は、同時代的に押し進められた生理学の機械論的、還元論的立場には必ずしも含意されていない。

41. スティーヴン・J・グールド『個体発生と系統発生』には、ヘッケルの次のような言葉が引用されている。「今日思索する人間たち全員を尽き動かすこの精神の闘争において、[中略] 一方では、精神的自由と真実、理性と文化、進化と進歩が学問の輝かしい旗の下にある。他方では、精神的隷属と偽り、非理性と野蛮、迷信と退行が階層制の黒き旗の下にある。…なぜなら進化史は、「真実を求める闘争」における重砲である！あらゆる部類の二元論的な詭弁は、この一元論の大砲の速射の下に脆くも崩壊し、「不謬の」教義の強力な砦であるローマカトリック教の位階性の尊大で強大な構造は、トランプの家のように崩れ落ちる。」(スティーヴン・J・

ゲールド『個体発生と系統発生——進化の概念史と発生学の最前線』仁木帝都、渡辺政隆訳（工作社、1987）128。ただし、注に掲載されたドイツ語原文（p. 567）に基づき、訳は適宜変更した。）

42. もちろん、以上の記述はあくまで概略にとどまっていて、個別の文脈に即してより細かい分節化が求められるだろう。19世紀ドイツの唯物論的な科学言説については上述の文献以外に以下を参照。Owsei Temkin, "Materialism in French and German Physiology of the Early Nineteenth Century," *Bulletin of the History of Medicine* 20 (1946): 322-327; Everett Mendelsohn "The Biological Sciences in the Nineteenth Century: Some Problems and Sources," *History of Science* 3 (1964): 39-59; —, "Physical Models and Physiological Concepts: Explanation in Nineteenth-century Biology," *The British Journal for the History of Science* 7 (1965): 201-219; Charles A. Culotta, "German Biophysics, Objective Knowledge, and Romanticism," *Historical Study in the Physical Sciences* 4 (1974): 3-38; Timothy Lenoir, *The Strategy of Life* (Chicago, 1982); Edward S. Reed, *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology from Erasmus Darwin to William James* (New Haven, 1997); トーマス・クーン「同時発見の一例としてのエネルギー保存」、『科学革命における本質的緊張：トーマス・クーン論文集』安孫子誠也・佐野正博訳（みすず書房、1998）89-122; 河本英夫「19世紀生物学と生物学史；問題論的構成と歴史記述

—今後の論考の序として—」*生物学史研究* 35(1979): 32-42; 上山安敏「社会現象としての感覚論——ドイツ世紀末から世紀転換期」『現代思想』1999年9月号：78-93。

43. 同時代の科学的な諸言説との比較におけるフェヒナーの諸々の著作の検討を、筆者は「G. Th. フェヒナー論：心理学の起源の名」（東京大学大学院表象文化論コース1999年度提出修士論文）第三章において試みた。そこでは進化論（『有機体の創造史と進化史に向けての二、三の理念』（1873））、細胞説（『ナンナ——あるいは植物の靈魂の生活』（1848）、『シュライデン教授と月』（1856））原子論（『物理学的ならびに哲学的な原子の教説について』（1855））の三つのコンテクストに渡ってフェヒナーのテキストが検討される。

44. Fechner, *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht* 8.

45. フェヒナーの伝記的な事実については、彼の甥の手による伝記、J. E. Kunze, *Gustav Theodor Fechner (Dr. Mises). Ein deutsches Gelehrtenleben* (Leipzig, 1892) を参照。

46. J. E. Kunze, *Gustav Theodor Fechner (Dr. Mises)* より引用。参照ページ数は順に 116、116、123、125。

47. イムレ・ヘルマンによる精神的な研究は、フェヒナーの病とそこからの快癒、そして彼の思想の総体をも、フェヒナーが五才の時に死んだ父親との関係において解釈する (Imre Hermann, "Gustav Theodor Fechner: Vortrag in der Ungarischen Psychoanalytischen Vereinigung, 1924," *Imago: Zeitschrift*

für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften 11(1925): 371-420)。ヘルマンによれば、病中のフェヒナーの光への恐れは父親への恐れであり、その克服は、自らの生と父親の「死後の生」の同一化に他ならない。さらに、人間の父としての神と人間の母としての地球も、フェヒナー自身の両親との関係において解釈されるだろう。

48. 病以前の科学者としてのフェヒナーの研究の主要な成果として、例えば次のようなものがある。Gustav Theodor Fechner, *Massbestimmungen über die Galvanische Kette* (Leipzig, 1831); —, "Ueber die subjectiven Complementarfarben," *Annalen der Physik und Chemie* 44(1838): 221-245, 513-535; —, "Ueber die subjectiven Nachbilder und Nebenbilder," *Annalen der Physik und Chemie* 50(1840): 193-221-427-470.

49. ミシェル・フォーコー「作者とはなにか」清水徹・根本美作子訳、『ミシェル・フォーコー思想集成Ⅲ』松浦寿輝編（筑摩書房，1999）237-238.

50. フォーコー「作者とはなにか」242.

51. 送り返される主体を弁別する言説の機能を担う要素を、我々はもう一つ挙げることが出来るかもしれない。すなわち、字体による弁別である。フェヒナーの病以後の主だった著作のうち、『ナンナ』、『ゼンド＝アヴェスタ』、『シュライデン教授と月』、『昼の観点』にはドイツ活字体が用いられ、

『原子の教説』、『精神物理学綱要』、『創造史と進化史』にはラテン活字体を用いられている。このような使い分けがフェヒナー自身の意図によるものであったのか、出版社の意図によるものであったのかは定かではないが、これが科学的言説の体系との距離によってなされた弁別であることは明らかである。ちなみに病以前には、フェヒナー／Dr. ミーゼスの弁別にラテン／ドイツの弁別が対応していた。したがって、フェヒナー／Dr. ミーゼスの弁別が病以後にも字体によって部分的には保持されていたと考えることは可能である。

52. フォーコー「作者とはなにか」235.

53. Edwin G. Boring, "Fechner: Inadvertent Founder of Psychophysics," *History, Psychology, and Science: Selected Papers* :126-131.

54. Boring, "Fechner" 130.

55. Edwin G. Boring, "Eponym as Placebo," *History, Psychology, and Science: Selected Papers* : 5-25.

56. Kuhn , *The Structure of Scientific Revolutions*,138-139 (156) .

57. フォーコー「作者とはなにか」242-248.

58. Boring, "Fechner" 131. 10月22日という日付は、1850年10月22日の朝、ベッドに横たわりながら、精神物理学の法則をひらめいたというフェヒナー自身の記述に基づいている (Fechner, *Elemente der Psychophysik* vol.2 545)。